
空は青、陽は赤、草は緑

冬空 奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空は青、陽は赤、草は緑

【Nコード】

N8476G

【作者名】

冬空 奏

【あらすじ】

戦が絶えない国「JAPEN」この国で、4人の侍が活躍する・・

第1話 「JAPEN戦争」 (前書き)

注…この小説には、一部グロテスク？な表現が含まれております
ポケットモンスターのFFです。世界観を潰したくない方は、見ないで下さい

JAPANやJAPONじゃなくてJAPENです
以上が大丈夫な人どうぞ

第1話 「JAPEN戦争」

第1話

「JAPEN大戦争」

「ついに始まったな……」

エルはそう言って空を見上げた

「ああ、この日には、なって欲しくなかったなあ……」

そう言ってソウルは刀を研ぎ始めた

「お前も、そう考えていたか……流石、幼馴染は争えないな……」

ソウルの方を向いてバクは言った

「ふうん……また、こういう事をしなきゃいけないのか……大変だねえ……」

刀を舐めて、リュウは言った

「おおい！お前達！もうすぐ、合戦が始まるぞ！」
やっと思つけたかのように大名が言った

「分かりました」

だるそうに四人が言った

’ # \$ % 5分後 & % ’ (

「♪」

ホラ貝の音が戦場に響いた

「よし！俺等もそろそろ行くか」

リュウはそう言って腰の刀を抜いた

「お前等の命頂戴する！！」

そう言って12人が、4人の周りを囲む

「はい……はい……」

そう言って敵の周囲にリュウは移動した

「こんな事はしたくなかったんだけどねえ・・・」

リュウはそう言って素早く動き敵を一瞬のうちに斬り倒した

「ぐわあああ!!」

そう言って12人は倒れた

「このまま、此処に居てもきりが無いねえ・・・移動するか・・・」

エルはそう言って敵の近くまで一人で行った

「はい、はい、ちょっと退いてねえ・・・」

エルはそう言って敵を歩く度一人斬っていく

「ようし、俺等も進むぞ!」

「おゝ!!!!!!」

ソウルの言葉で一致団結した四人だった

「貴殿は、名のある大将と見た!」

そう言って、敵の將軍が走ってきた

「それは、褒め言葉なのかな? 嬉しいねえ・・・でも君は、もう逝ってしまっただね・・・」

そう言ってソウルは、將軍の体を刀で貫通した

「フハハハ!! 貴様! 背後がから空きだ!!」

そう言ってバクの背後に敵が向かってきた

「何!? いない!?!?・・・ぐはっ!」

敵が油断しているスキに後ろに回り敵を斬った

「一瞬のスキも見せちゃあ、駄目だぜ」

真剣な目つきでバクはそう言った

「貴様はがらあきのようだな!」

「ま・・・まずい」

この時エルの腕が硬直していたのだ。

その時だった

「かはっ・・・」

エルをかばって味方の足軽が斬られてしまった

「お・・・俺の為に・・・お前の命・・・無駄にはしないよ・・・」

エルはそう言って硬直している腕で刀を握った

「無駄だ！貴様が刀を握ろうと、すぐに貴様は散る！」

そう言って敵は、再びエルに向かった

「そうかな・・・この刀には、皆の思いが込められているんだ・・・それを貴様は受けれるか！」

そう言ってエルは敵を斬った

「ぐはっ・・・」

そう言って敵は倒れた

「悪いな・・・今は、敵と味方に別れているんだ・・・君は敵じゃないと良かったのに・・・」

そう言ってエルは空を再び見上げた

「足軽よ・・・君の命は無駄にしまったよ・・・これで、許してもらえるかな・・・」

空に向かって再び呟いたエルだった

「お前・・・何言ってるんだ？」

ソウルはそうエルに問いかけた

「いや・・・何でもない」

微笑んでエルは答えた

「また、敵さんのお出ましかい？今度の敵さんはどうやら、少し強い様で」

そう言って、バクは後ろを向いた

「我は、この軍の要！毛利なり！皆の者！一気に叩き潰せ！」

そう毛利が言くと、4人の周りを敵が囲んだ

「そろそろピンチかなあ・・・こちらも、本気で行かせて頂くよ・・・」

リュウがそう呟いた

「うおおお！」

敵が一気に攻めてくる

ドサッ・・・

その音と同時に毛利軍は毛利一人となっていた

「え・・・ちよっ・・・まっ・・・ぎゃああああ！！！」

その喚き声とともに、毛利は永遠の眠りについた

1話

THE
END
・
・

第1話 「JAPEN戦争」 (後書き)

これは、本編のキャラの昔話です

ついでに、ソウルⅡバシャーモです

毛利Ⅱスイクンです

とりあえず、偶にしか、更新しないかも知れませんが宜しくです
一応、感動的なシーンも含む予定です

第2話 E N D O f F O R E V E R (前書き)

今回は、やたら長い名前の奴です^^；

第2話 E N D O f F O R E V E R

第2話

「さあて、毛利は敗れたようだが・・・まあだ、沢山居るようで・・・」

眠りについた毛利の方を見ながらソウルは言った

「いやはや、また、囲まれたみたいで・・・リュウさんは大丈夫かい？」

敵に囲まれながら、エルは言った

「少し・・・疲れが・・・出ているだけだ・・・」

リュウは息を切らしながら言った

「%\$&、3時間後%\$&、」

「ハア・・・ハア・・・」

4人全員が、さっきの敵襲で、かなり疲れた様だ

「此処の方角の敵は全て消えたみたいだ・・・此処で休むか・・・」
エルは岩にもたれて言った

「うむ、それが一番だろう・・・」

（&%3時間後）&%

「敵さんもこりないねえ・・・」

あの4人は、また敵に囲まれた様だ

「さぁ・・・今回こそは、首を取らして頂こうか・・・」

敵の軍の中から一人歩いて出てきた

「我が名は、E N D O f F O R E V E Rだ・・・」

そのポケモンは、名を名乗る

「ほう・・・じゃあ、仮にE N Dと呼ばせて頂こうか・・・」

リュウは少し笑って言った

「さぁ・・・楽しく残酷な劇の始まりだよ・・・兵士達よ・・・行け！」

&’&2時間後&’&

「さぁ、残りは、お前だけだな・・・E N D・・・」

E N Dの方を見ながら言った

「じゃあ、楽しくさせて頂くよ♪」

そう言ってE N Dは攻撃体勢を整える

「手加減はしないぞ・・・」

エルは刀を抜いて言った

「貴様の動きは全て読んでいる・・・貴様、我の右に回ろうとしただろう・・・」

長々とE N Dは語った

「なっ!?!・・・何故それを・・・」

エルは驚いて啞然とした

「ふん・・・甘いよ・・・」

そう言ってE N Dはエルの背後に向かった

「ボーっとしてんじゃねえ！エル！」

そう言っソウルがENDの刀を受け止める

「ぬうつ！？やるなあ、お主」

ENDは笑って言った

「甘いな・・・安らかに眠れEND・・・」

そう言っバクはENDに刀を貫通させた

「かはっ！？・・・我より強い野郎は・・・どんと居る・・・でも・・・お前達なら・・・できるさ・・・」

そう言っENDは倒れた

「いい奴だった様だな・・・まあ、敵は敵だ・・・」

エルは少し悲しげに言った

「END・・・お前を俺は忘れない・・・」

空を見上げながらバクは言った

2話THE・・・END

第2話 E N D O f F O R E V E R (後書き)

ついですが、ENDはラグラージです

ENDは名前長いですが・覚えて下さい
ではっ

第3話 F A I N A L (前編) (前書き)

えっと、最近ネタが切れてきました・・

ですので、つまらない確率が高いです

結構ベタですので^^;

後もう一つは、後書きの方で話します^^;

では、どうぞ

第3話 F A I N A L (前編)

第3話

「THE END・復活」

「にしても、あんな強い敵は今まで会った事が無かったな……」

エルは驚きながら血のついた、刀を研ぐ

「そうだな……ん？今日は、曇天だな……」
空を見上げてリュウは言った

その時だった

「ん？冷たい……雨か……」

血みどろの戦場に、雨が降ってきたのだ

その雨は、時間が経つにつれ、勢いを増す

「しばらく、休むか……」

&&&2時間経過&&&

「やっと、やんだが……濃霧だな……」

戦場は、霧にまみれていた

「なんて事だ……視界が見えない」

ソウルは目をこすって言った

「よう……お前達の首を貰おうか……」

霧の中から人が俺達に向かってくる

「私の名は、F I N A L……」

少しこもった声で言った

「自己紹介どうも……FINALなのに、最後じゃないのかい？」

少し笑ってリュウは、言った

「いや……最後だぞ……」

そう言ってF A I N A Lは4人の元へ来た

「その様だな・・・いざ・・・勝負!!」

リュウは笑って言った

「覚醒・・・シンソクノツルギ・・・」

そうFINALは呟いた

「なッ!? 刀が・・・早すぎる!?!」

リュウは啞然としながら言った

「こっちだ!」

そう言ってリュウの背後から攻めてきた

「ぬっ!?!」

リュウは斬られる寸前で刀を受け止めた

「此処だ!」

FINALはそう言ってリュウの前方へ回った

「ヘッ!?!」

リュウはまたしても啞然としかできない様だ

「遅い・・・遅すぎる!!!」

そう言ってFINALはリュウにまた斬りかかった

(考える・・・奴の弱点を・・・)

「さあ・・・最初の余裕はどうした?」

笑ってまたリュウに斬りかかる

「ぐはっ!?!」

リュウは肩近くを斬られた様だ

(はっ!?! 待てよ・・・あいつ・・・まさか、霧を利用して・・・)

「遅いぞ貴様!!」

そう言ってまたリュウに斬りかかる

「ふうん・・・」

そう言ってリュウはFINALに斬りかかった

「私に刃向かおうとは・・・命知らずな奴だ・・・」

FINALは笑って言った

「な・・・何ッ!?!」

FINALは大木に押しつぶされた

「よし．．．今だ霧を片付けろ！」

リュウは仲間にそう命令した

「やるな．．．しかし、俺はシンソクだけじゃないぞ．．．」

FINALは笑ってそう言った

「覚醒．．．キジンノツルギ．．」

そう言ってFINALは上の大木を切った

「もう．．．御終いか．．．情けない奴らだ．．」

溜息を一つついてFINALは言った

「何ッ!？」

3話THE．．END

4話へ続く．．．

第3話 F A I N A L (前編) (後書き)

今回、F A I N A Lというキャラを出しましたが・・

技の募集をしたいと思います^^;

技が思いつかないのです^^;

どんな技か、技名は? だけですので^^;

良ければ、感想で書いて下さい

第4話 F A I N A L（後編）（前書き）

今回はグロい表現が入っております
できるだけ、コメディを入れてないつもりです
では、どうぞ

第4話 FINAL（後編）

第4話

「お前は、しぶとい奴だなあ・・・」

FINALに向けて言うリュウ

「お前はTHE・・・ENDにしてやろう！」

そう言って弱ってるリュウに向かって来た

「な・・・何ッ!？」

FINALの刀は弾かれた

「お前も・・・疲れが・・・でたか・・・青い野郎！」

「お前は・・・」

驚きを隠せないリュウだった

「そう・・・この俺・・・ENDだ・・・」

血を少し吐きながらENDは言った

「お前・・・死んでなかったのか・・・」

驚きながらリュウが言った

「でも・・・俺も長くは持たない・・・」

ENDは手を震わせて言った

「邪魔だ!とっとと消えうせろ！」

FINALはそう言ってENDに斬りかかった

「・・・今度会う時は・・・あの世だな・・・ちよつとは役に・・・立てた・・・か・・・」

「ぐはっ!もう・・・俺は・・・駄目・・・だ」

「じゃあな・・・」

そう言ってENDは地に血をにじませて倒れた

「END・・・やはりお前は見込みのある奴だった・・・」
そう言ってリュウはENDの遺体の上に水をにじませた
この、血みどろの戦場に・・・

「貴様！スキがあり過ぎる！」

FINALは、またリュウに斬りかかった

「貴殿！戦場で悲しむなど、外道だ！」

そこに居たのは、一匹のスイクンだった

「お前は・・・もしや・・・毛利！？」

驚きをリュウは隠せなかった

「我もまだ死んでおらん！勝手に殺すな！」

毛利は怒ってFINALにその怒りをぶつける

「すさまじい力だ・・・」

FINALは驚きを隠せなく、咄然としていた

「しかし！俺に比べればこんな者！蟻どうぜんだ！」

そう言ってFINALはまた技を使った

「センコウノツルギ・・・」

FINALは刀でまばゆい光を発生させた

「ぐわっ！？」

毛利はひるんだ

「シンソクノツルギ・・・」

そう言って毛利に斬りかかった

「・・・いいか・・・これだけは・・・覚えとけ・・・」

「ピンチの・・・時は・・・敵も・・・味方も・・・関係ねえ・・・」

「楽しかったぞ・・・お前との決闘・・・」

毛利は死に際にリュウに向けて笑って言った

「・・・さねえ・・・」

「何と言っているんだ？全く聞こえないぞ！」

笑ってFINALは言った

「お前だけは、絶対ゆるさねえ！！」

水を流しながらリュウは叫んだ

「やってみろ！俺に勝てるのならだがな！」

大笑いしてF A I N A Lは言った

「瑠華流剣術・・・攻撃スルコト龍の如く！！」

そう言っつてリュウはF A I N A Lに向かった

「何！？このすさまじい力は！？」

啞然として何もできないF A I N A L

「さらばだ・・・F A I N A L・・・」

そう言っつてF A I N A Lの右から背後に回り心臓あたりを刺した

「がはっ！？・・・私も・・・あいつの元に行くのか・・・さらばだ・・・」

「

そう言っつてF A I N A Lは桜の如く散った

そして、その戦場の霧が晴れて頭上には、虹が見えた

「この戦場にも・・・光があったのか・・・」

上を向いてリュウは涙を流した

「おい・・・リュウ」

リュウの肩を叩いてバクは言った

「上だけでは無く、下も見てみる」

涙を流しながら、笑ってバクは言った

「これは・・・」

その草木もなく血みどろの戦場には、小さな芽が二つ生えていた

「もしかすると・・・毛利とE N Dなのかな・・・」

芽を見ながら涙を流してリュウは言った

「さあ、リュウこの戦場と、彼等とお別れだ」

涙を振り切つてエルは言った

「そうだな・・・次の場所に行こうか・・・」

そう言っつて四人は涙を拭いて次の場所へ向かった

4話 T H E E N D・・・

第4話 FINAL（後編）（後書き）

今回は結構グダグダです

ですが、これからも応援宜しくです

そして、これで第一章終了です

桃源郷を目指して（前書き）

今回は次の場所への道のりです^^；
少し、コメディを入れましたが^^；
リュウ「では、どうぞ」
あ、言われてしまった（汗）

桃源郷を目指して

第5話

「さて、今回の戦も終わったし帰るか」

リュウは荷物を背負って言った

「君達ゝ次の戦の場所だ！」

足軽が走って4人の所へ行く

「まだ、あるのか・・・えっと、場所は桃源郷ね・・・」

リュウは地図を見ながら言った

「え・・・と・・・桃源郷！？」

バクは驚きを隠せない様だ

その理由は分からぬくもない。

桃源郷は仙人が居る場所とされているからだ。

「はい、はい。分かったよ・・・桃源郷だな」

「じゃあ、行くか・・・」

リュウはだるそうに言った

「そうだな・・・だらだらしても始まらない」

そう言って4人は歩き始めた

\$%&道中%\$&

「何か、深い森だなー」

4人は樹海の中に居た

その樹海は、歩けば歩くほど深くそして、二度と出れないと噂が立っているらしい

「これ、本当に着くのか？ 凄く深い森の中に段々と入って行ってる気がするのだがへへ；」

バクはリュウに尋ねた。

「多分・・・今日は、此処で野宿だな・・・」

リュウは草木を切りながら言った

＃\$%1時間後＃\$%

その森に、光は入らずただただ深さを増すだけだった

辺りを見回すと、何処も彼処も草と木ばかりだった

「これ、抜かれるのか・・・痛ッ！」

バクは死んだ目でリュウに向かって言った時に何かにぶつかった様だ

「うわぁ・・・すげえ、でかい木がある・・・」

バクはその木を見渡した

草木が茂る森の中に外から見ても目立つ程大きい木が立っていた
その木には神秘を感じた。大きさは、グラードン6匹分位だろう。

「何かでかい木だな・・・」

バクは頭をさすりながら言った

（お主等・・・此処から脱出したいのか？）

「だ・・・誰だッ！？ 何処に居るッ！？」

リュウは警戒して言った

（お主等の目の前だ・・・）

「お前・・・もしや、この木か？」

リュウは刀をしまつて言った

（その通りだ・・・此処から脱出したいのか、と聞いている・・・早く
答えろ！）

「脱出はしたいけど・・・」

リュウは頭をかきながら言った

（貴様等に刺客を送ろう・・・そいつに勝てば此処から脱出出来る）

「負けたら？」

リュウはだるそうに言った

（その場で死ぬ）

「えらくあつさり言うねえ・・・」

エルが首を振って言う

「私の名は暁・・・刺客だ・・・」

4人の前に一匹のポケモンが現れた

「こいつに勝てばいいのか・・・弱そうだな・・・」

首を鳴らしながらリュウは言った

「ようし、向かってやらあ！」

リュウは暁に思いつきり斬りかかった

「ふえっ・・・む・・・無理っ！！」

暁はいきなり泣き出した

「は・・・へ・・・？」

リュウは啞然とした

「お前ってさ・・・年いくつ？」

エルは暁の顔を覗き込んで言った

「11・・・」

泣きながら暁は答えた

「そうか・・・おい！これで脱出させてくれるんだろうな？」

リュウは怒鳴った

（ああ・・・うん・・・）

「そうか・・・何故か・・・眠・・・く・・・」

そう言って4人は倒れた

\$%&翌朝%\$&

「あ、桃源郷に着いてるぞ・・・」

看板を見てエルは言った

「もうすぐ、始まるのか・・・しかし、暁の野郎見掛け倒しだなあ・・・」

頭をかきながらリュウは言った

第5話

THE・・・END

桃源郷を目指して（後書き）

暁・・名前の見掛け倒しです

ついでに、暁はカイリユーのマネをしたりオルです

まあ、着ぐるみ的な奴です^^；

リアルな^^；

ではっ

次も宜しくです^^

第6話 昨日の敵は今日の友（前書き）

今回も、テキトーにやらせていただきます

第6話 昨日の敵は今日の友

第6話

「にしても・・・もう囲まれちゃうの・・・」

リュウは溜息をついて言った

桃源郷の戦が始まったと思えば、いきなり敵に囲まれた

「じゃあ、行くよ・・・3・・・2・・・1・・・GO・・・」

そうエルが数えた後四人は四方八方に飛んだ

その後、敵はフラリと倒れていった

「もう終わりか・・・締りの無い奴らだなあ・・・おい」

刀をしまいながらエルは言った

「あいつ何だったんだろうな？」

空を見ながらエルは言った

「暁か？あいつは、唯の小五か小六だろう？・・・」

笑ってリュウは言った

「まあ、敵の大名さんも来なすったよ・・・」

刀を地面に刺してエルは言った

「覚悟！」

勢いよく、4人に大名は向かってきた

「いよつと・・・」

エルは刀を軸にしてヒラリと攻撃を交わした

「御免ねえ・・・先急いでるからな・・・せめて、桜の様に美しく散りな・・・」

「秘技・・・桜咲き乱れ・・・」

そう言ってリュウは刀を一瞬で出し、桜吹雪を散らせて刀を閉まった

「リュウ・・・お前そんな技、俺知らないぞ・・・」

息を飲んでソウルが言った

「フフ・・・最近、取得したのだよ・・・」

フツと笑って言うリュウ

「まあ、無駄話も程々にしろ・・・また来たぞ」

息を殺してバクは岩陰に隠れた

「無駄だよ・・・君達♪僕には、君達はお見通しさ♪」

そこにはヘッドホンを付けた一匹のレントラーが居た

見事に、着物を着こなし血みどろの地をズッシリと踏む

「お前・・・名を名乗れ・・・」

警戒してリュウは言った

「僕の名前かな？僕は孤独　銀だよ・・・」

笠を取って銀は言った

「銀か・・・無論、俺達の討伐が目的か？」

刀を構えてリュウは言った

「首目当てじゃないよ♪君達と遊びに来たんだよ・・・」

フツと笑って銀は言った

「そうか・・・じゃあ、いざ勝負・・・」

そうリュウが言ったとたん凄まじい速さで銀は背後に回った

「うおい！？いきなりだなあ・・・」

少し笑ってリュウは言った

「フフフ・・・煙火弾！」

そう言って銀は一瞬でバズーカを取り出した

「切断技　神剣　一刀両断！」

そう言って煙火弾の前にリュウは向かった

「なッ！？」

リュウは煙火弾を受けなかった

何故か？・・・そう、斬ったんだよ・・・

「今度は、こっちだ・・・桜旋風！」

そう言ってリュウは刀を変えた

「この桜の量を見たのは、二回目かな・・・」

そう言ってフラリと銀が立ち上がった

「くらエエツエエ!!」

そう言ってより強くリュウは竜巻を発生させた

「ぐわああああ!!!」

そう言って銀は倒れた

「僕は死にたくはないかな・・・」

そう言って銀は立ち上がった

「でも、負けたよ♪君の仲間として着いていこうかな・・・」

そう言って銀はまた倒れた

「ああ、着いて来てくれるのか？」

「勿論だよ・・・」

銀は弱りながらもリュウに手を差し出した

「戦もな、数が増えた方が頼もしい・・・そして、お前なら大歓迎だ」

そう言ってリュウは笑って銀に手を差し出した

二人は、重大契約を結んだようにがっちりと手を繋いだ

その二人の手は夕日に照らされていた

6話THE END

次回予告

「あれが、大將軍だよ・・・リュウ君・・・」

「あの、でかい野郎が・・・」

5人の運命やいかに!?

この春? いや、夏? 物語はクライマックスへ!

第6話 昨日の敵は今日の友（後書き）

今回は新しいキャラを出しました

銀・・・パクリすぎかなあ・・・

まあ、次回は強大な敵 大將軍が現れます
次回に、どうぞ期待！

第7話 大將軍現る!?(前編) (前書き)

今回出てくる大將軍と言うのは結構強い設定です
では、どうぞ

第7話 大將軍現る！？（前編）

第7話

「大將軍現る！？」

「にしても銀、お前敵だから次誰が来るか分からないのか？」
銀に尋ねるソウル

「知らない・・・でも、一つだけわかる・・・大將軍が来るよ・・・」
真剣にヘッドホンを取って銀は言った

「大將軍！？何だそりゃ！？」

そうバクが驚いている間に地震が起きた

「・・・大將軍が来る・・・」

小声で銀は言った

「マズい！あの方が早めのご到着だ！撤退！」

そう言って敵軍は撤退した

「で、銀・・・なんでお前も撤退してんの？」

リュウが銀を掴んで言う

「マズい！皆、伏せて！今から突風が吹くよ！」

4人に銀は指令をだした

「マジだ！無茶苦茶強い風だ！」

吃驚してリュウは言った

「お前達の相手は私だ！」

そう天から大きい声が聞こえた

「誰だ！？名を名乗れ！」

「それ、お決まりなのね・・・」

後ろから呆れてエルが言った

「私は、神にも等しい存在の・・・大將軍 神鳥 翼だ！」

そう言って翼は地上に物凄い光とともに、着陸した

その、戦場には神が舞い降りたと言っても良いだろう。

青い腹、白い翼と体と足、そして赤い目・・・

お分かりだろうが、大將軍の正体はルギアだったのだ

「な・・・お前が・・・大將軍か！？でかすぎるだろ・・・」

驚きを隠せないリュウ

それもそのはずだ。普通より大分大きいだろう。

ヒノキと同じ位の大きさだろう。

刀も、10メートルはあるだろう・・・

「貴様か・・・やってやろう！」

翼はそう言って巨体のクセに物凄い速さで向かってきた

「刀も・・・スケールが違うな・・・」

咄然としてリュウは言った

「えいやあああ！！」

そう言って翼は刀を振り下ろした

「ぬう・・・物凄い力だな・・・」

そこに居たのはエルとソウルだった

「小賢しい！消え失せろ！」

「大將軍 秘伝の技・・・螺旋剣！」

そう言って翼は刀を一気に螺旋にさせた

「何だ・・・あの刀・・・」

驚いた表情でエルは言った

「フフ・・・リアクションは満点だな」

そう言って翼はこの螺旋剣を使った

「へ・・・刀が吸収された！？」

エルは驚きを隠せない様子だ

「これで・・・とどめだ！」

そう言って翼は刀を振り下ろした

「じゃあな・・・楽しかったぜ・・・さあ、先にいけ・・・」

そうエルが死ぬと覚悟して言った時だった

「何ッ！？」

翼は刀が弾かれたのだ

「お前は・・・暁ッ!？」

「僕の事はいいよ・・・さあ、早く行って!」

手裏剣を集めた刀の様なものでガードをする暁

「分かった・・・いいか、絶対死ぬんじゃないぞ!!」

「うん・・・しばらく、大將軍とやらの相手をするよ・・・でもそっちに向かうかも知れないよ・・・」

「そんな事はいい・・・とりあえず死ぬなよ・・・」

そう言ってエルは4人の方へ向かった

\$%&30分後#\$%

「何者だよ・・・あいつ・・・」

息をきらしながらリュウは言った

「大將軍の脅威が分かった?・・・待てよ・・・この感覚・・・大將軍がまた来る!」

急いで逃げ道を探しながら銀は言った

「こいつは始末した・・・次は誰だ・・・?」

笑って翼は言った

「暁・・・天が許しても俺が許さん!!」

リュウは威勢良く言った

7話THE・・・END

2話分位の次回予告

「あいつ・・・何なんだ・・・一体・・・」

「あれが、最終形態だよ・・・あいつの・・・」

第7話 大將軍現る!?(前編) (後書き)

リュウ「あれに勝てるか?俺等?」

大丈夫だと思う、読者の皆様に応援でも求めてみたら?

リュウ「応援・・・宜しく・・・べ、別にして欲しい訳じゃないから・・・

」

何故ツンデレ・・・ではっ

次回にご期待下さい

第8話 大將軍現る!?(中編)(前書き)

今回もあの、翼です

リュウ「と言うか・更新遅くない?」

色々有ったの!!(汗)

第8話 大將軍現る！？（中編）

第8話

「私を倒せるとでも思ったか！！」

笑って翼は言った

「そんな事は1ミリたりとも思っていない・・・」

刀を構えてリュウは言った

「俺は・・・ただ、仲間を守りたいだけだ・・・もう、これ以上は何も背負いたくないんだ・・・」

「その昔話とやら・・・死ぬ前に聞いてやろうじゃないか・・・」

%&’回想’(&

「皆で頑張ろう！！・・・そして、この場所で生きて全員で会おう！」

笑ってリュウは言った

「おっ！！」

皆が手を合わせて言った

%&\$戦終了後%&’

「誰も・・・いない・・・」

辺りを見回してリュウは言った

「あんなに・・・約束したのに・・・誰も約束を守ってないよ？・・・」
声を震わせてリュウは言った

「また・・・孤独になった・・・皆は何処に逝ったの・・・？」

「なんで、一人だけ助かったの？・・・それなら、僕も・・・僕も・・・」

「

リュウは冷たく綺麗な雫を頬に垂らして刀で自分の首を斬ろうとした
「そんな事をして、大事な仲間は喜ぶか・・・？俺なら、そんな奴とは縁を切ってるな・・・」

後ろでリュウの手を掴んで一人の男は言った

「お前が何をしようと、俺には関係ない・・・でもな、お前だけでも

生きている・・・」

「きつと、お前も死んでいたら・・・あの世で皆悲しむだろう・・・」

手を掴んだままリュウの耳元で男はそう呟いた

「貴方は・・・誰ですか・・・」

「名乗るほどの者ではないが・・・どうしてもと言うのなら教えてやろう・・・」

頭をかきながら男はリュウの質問に答えた

「是非お願いします!!」

「仕方ねえ・・・俺の名は春菊・・・唯の、着物を着た可笑しな武士さ・・・」

リュウの方を向いて春菊は言った

「春菊・・・覚えておきます!」

笑ってリュウは言った

「フッ・・・次会うのは、いつだろうな・・・」

そう言って春菊は、霧の中へ消えていった

\$%&現在\$%&

「そういう訳だ・・・行くぞ!!」

そう言ってリュウは大將軍に斬りかかった

「ふうん・・・所詮はこの程度か・・・守る程度のものでも無い・・・」

そう言って翼はリュウの一撃を普通に受けた

「じゃあ、これはどうかな?」

突然、後ろから声がする

「だ・・・誰だッ!？」

驚いて後ろをリュウは見た

「僕だよ・・・」

バズーカを構えながら暁は言った

「発射く!!」

そう言って暁はバズーカを翼に向けて撃った

「ぬ!?!?・・・油断しすぎておった・・・」

翼は自分の胸を押さえながら言った

「はい!次イイ!!」

そう言って銀は翼の背後から奇襲をかけた

「むぐっ!?!?・・・貴様・・・小癪こしゃくな・・・」

埃を払いながら翼は言った

「おらよっ、と・・・」

「はい、こっち。」

あの炎タイプの二人も翼に向かっていった

「はいはゝい。3刀流つと・・・」

そう言っつてリュウ以外の全員は翼に向かって行った

「小賢しい!!」

そう言っつて5人を吹き飛ばす

「私の番だな・・・FINAL・DEATH・・・」

そう言っつて翼は自分の刀に闇の力を宿した

「あ・・・あれは!!」

「どうした?銀?」

銀にリュウは尋ねた

「あれは、伝説の妖刀・・・闇黒・・・」

闇黒とは・・・武士の中で伝説とされている刀・・・

その刀の所有者は鬼神の如き力と岩の如き硬さを手に入れる

そして、この刀は・・・誰かを斬らなければ所有者は死ぬと言う・・・

・伝説がある

しかし、これを持っつていても死なない方法もある

それは、大將軍の称号を手に入れる事・・・そうする事で、人を斬らなくても生きれる・・・

「あいつ・・・本気で、僕達を殺すつもりだよ・・・」

息を飲んで銀は言った

「馬鹿野郎・・・今が一番いい時だ・・・此処で諦めたら即、試合終了だ・・・」

「リュウ・・・」

「さあ・・・来るがよい・・・」

笑って翼は言った

「言われなくても行くぜ！」

そう言って翼の方にリュウは向かった

「戯れは終わりだ・・・」

小さな声で、翼は呟いた

第8話THE・END

第8話 大將軍現る！？（中編）（後書き）

リュウ「妖刀とかいらないから！」

いいじゃん

リュウ「面倒くさいからアアアアア！」

第9話 大將軍現る！？（後編）

第9話

「うおらあ！」

先手を取ったのはやはり、リュウであった

「そんな、弱弱しい攻撃が我に当たるか！」

そう言って、翼は綺麗によけた

「今度は、こっちだ・・・覚悟せい！！」

そう言って、翼は刀を振り回した

「何処狙ってんの？全然当たってな・・・」

「リュウ！伏せて！」

そう、大声で言ったのは銀だった

「何故だ？」

と、リュウが言った瞬間・・・周りに、約5mの衝撃波が、1000mを秒速50mで飛んで行く

「・・・怖い野郎だぜ・・・」

そう、リュウが言った瞬間だった。

「・・・足元、注意だ・・・」

そう小声で翼は言って、小型の刀を取り出しリュウの足に傷を負わせた

「これ位で、俺は倒れな・・・」

そう言った瞬間だった

「ぐっ・・・てめえ・・・何を・・・」

「この刀は斬った野郎を一定時間はシビれるだろう・・・」

そう言って、翼は小型の刀を閉まった

「死ねエエエ！！！」

誰もが終わりかと思ったその時だった

「なっ・・・」

「刀がデカいだけじゃ、勝率は無いぞ・・・」

そこに居たのは、着物を着た可笑しな武士だった・・・

「あ、あんた・・・」

「久しぶりだな・・・こいつが、大將軍ね・・・はいはい・・・」
刀を弾き返して、テキトーに受け答えるのが可笑しな武士流なの
だろう・・・

「ありゃ？張り合いが無いな・・・あいつ、気絶してやがる・・・」
笠を上にあげて、可笑しな武士は言った

「あんたには・・・2度も救われたよ・・・春菊さん・・・」

シビレがとけたのか、膝に手をあてて言った

「ん？気にするな・・・前から、進歩が無いな・・・ハハ、可愛い
奴だなあ・・・」

「か・・・可愛いなんて・・・ひぐっ・・・言うなよ・・・」

綺麗な水の粒をポツポツと草木の無い地面に落とす

「さあ、俺の所に来い・・・」

ちよいちよいと、手でリュウを誘う

「お前は、良く頑張ったな・・・」

子供の様に、春菊の膝の上に頭を乗せて撫でて貰う、リュウに春菊
は言った

「お前は、剣術の腕はいいようだが・・・精神面は弱いんだな・・・」
リュウの頭を撫でながら春菊は言った

「そ・・・そんな事言うなよ！」

反論するリュウ

「リュウにも、可愛い所があるんだなあ・・・」

そう呟いたのは、エルだった

「そつとしといてやれ・・・」

そう言ったのは、ソウルだった

「おうい、春菊さんとリュウよ・・・そろそろあいつが来るぞ・・・」

「そうかい・・・じゃあ、行くか・・・」

春菊はそう言って、立ち上がった

「フハハハ！！我が魂は不滅だ！！」

そう言った直後だった

「はい。此処が核コアだな・・・」

「ぐああああ！！！！」

一瞬にして、核を突き止め春菊は刀を刺した

「これが、最終形態ではない！」

「ぐあああ！！！！」

もう、ルギアの形を捉えていなかった

第9話THE END

第9話 大將軍現る!?(後編)(後書き)

更新遅いですね(汗)

リュウ「ちよと、遅すぎだな・・・」

そうか・・・ではっ

リュウ「ううつ・・・ひぐっ・・・」

可愛いな・・・頬も染めて・・・

第10話 大将軍現る！？（完結編）（前書き）

やっとかけた・・・

リュウ「遅いな（汗）」

作者の力作なんですよね（汗）今回の話・・・

リュウ「そういえば、なんであんなタイトルなんだ？」

それはね・・・実はこんな意味があるんだよ・・・

空は青〓リュウ

陽は赤〓バク

草は緑〓エル

なんですよね（汗）色だけを取る（汗）

リュウ「ソウルは？」

いない理由は、この話を見れば多分分かる！

リュウ「多分か（汗）」

では、どうぞ！

第10話 大将軍現る！？（完結編）

第10話

「ぐあああああ！！！」

「・・・・・・・・どうしたんだ・・・・・・・・あいつ・・・・・・・・」

息を吞んでリュウは言った

「ギャアアアア！！！！！！！！！！」

翼は痛々しい声を上げている

そして、段々と体が闇に飲まれていく

「伝書の通りだな・・・・」

そう言って、春菊は伝書を閉じた

「どうした？春菊さん」

そう聞いたのはソウルだった

「ダイショウグンノショウゴウヲテニスルモノ、レキダイショウグンノチカラヲテニスル・・・・」

「ソノトキソノモノハ、ヤミニツツマレサケビクルシメラレル・・・・残念だがこの先は無い・・・・」

伝書を閉じて春菊は言った

「今は・・・・・・・・あいつがそうだと言うのか？」

ソウルは翼の方を見て言った

「そうだ・・・・・・・・もうすぐ終わる・・・・」

「フハハハハハ！！！！我が全てを壊す！！」

高笑いをして翼は言った

「ついでだが、あいつにもう元の人格などはない・・・・・・・・あいつは、闇だ」

刀を抜きながら春菊は言った

「そうか・・・・・・・・分かった」

後ろに居たリュウが言った

「全てを壊して我が神に等しい存在となるのだ!!!!」

「くらええええ!!!!!!」

そう言って刀を一振りした

「当たるかよ!こっちな、喰らえ!!!!」

そう言っけリユウは翼に刃を向けて刀を一振りした

「あまいな・・・お前から、痛めつけてやろう・・・」

そう言っけ翼はリユウの後ろに回った

「しばらく・・・黙ってな・・・」

翼は小さめの刀を取り出してリユウの足元に刺した

「うぐっ・・・」

そう言っけリユウは座り込んだ

「俺もそろそろ行かないとな・・・ダメージは与えといてやるから後は頑張れよ」

そう言っけ眼にも見えない速さで翼の方に行く

「小賢しい!!!」

翼は刀を一振りした。しかし、春菊はそれをよけて翼に刀を向けた

「youの弱点は此处だな・・・しばらく、重症を負う事だろうよ・・・」

春菊はそう言っけ翼の肩甲骨の真ん中あたりに刀を刺した

「ギャアアアア!!!!!!」

そう悲痛な叫びをして翼は背中を押さえた

「じゃあな・・・俺は、この近くの団子屋に行っけ来る・・・会いたきゃ、来てもいいぜ」

そう春菊が言っけ時は、もうピンク色の着物も見えなかつた

「有難うよ・・・春菊さん・・・」

春菊の方を向いてリユウは言っけ

「ハア・・・ハア・・・」

背中を押さえながら立つ翼。しかし、息は荒れている

「遊びは・・・此处・・・まで・・・だ・・・」

フラつきながら、翼は刀を抜いた

「死ねエエエエ!!!!!!」

そう言って、リュウの方に刀を突き出した。

そして、翼は思いつき走り回ってくる。どうやら、刃の先で痛めつける様だ

(じゃあな・・・皆、今まで有難う・・・でも、俺はもう・・・駄目だ・・・御免な・・・)

(皆で生き残るって言ったのに・・・でも、俺が死んでも悲しむ奴は居ない・・・)

そう心の中で呟いて、リュウは眼をつぶった

そして、丁度リュウの方にせまってくる

(さようなら・・・)

「お前を・・・死なせて・・・たまるか・・・よ・・・」

吐血しながらも、一人の侍が言った。それはソウルだった

「ソウル!!!!!!」

「どうせ・・・死ぬんだ・・・俺の様な奴より・・・リュウの様な奴が・・・生きた方が得だよ・・・」

ソウルは少し、冷たくてさびしい水の粒を流した

「くそう・・・俺は本当に、サイテーな野郎だ・・・」

「俺のせいで・・・ソウルが・・・ソウルが!!!!!!」

悔やみながら下を向いて、頬にリュウは冷たい雫を流した

「そんな事はない・・・」

そう言ったのは、エルだった

「もし、お前がサイテーな奴なら皆、お前を見殺しにするはずだ・・・」

リュウの方を向いてエルは言った

「お前を信頼できるからこそ・・・身代わりになってくれたんだよ・・・」

「ソウル・・・お前・・・」

泣きながら、ソウルの方をリュウは向いた

「そうゆう・・・ことだ・・・俺が死んでも・・・悲しむなよ・・・」

」

そう言った後、リュウの方を向いてソウルは笑った

「じゃあな・・・」

そう、一言を残して・・・

「ソウルウウ！！！！」

リュウは酷く嘆き悲しんだ

しかし、もうリュウにソウルは言葉を返してはくれなかった

「・・・・・・・・ツ！」

リュウは、ただ泣くばかりだった

何も出来なかった自分を悔やみ・・・

そして、仲間が永遠の眠りについてしまったことに・・・

「さあ・・・次こそチェックメイトだ・・・」

刀を研いでいた翼が言った

「しっかり、足の痛みはとれたぜ・・・」

水の粒を拭いてリュウは立ち上がった

「今度こそ・・・死ねエエ！！！」

「望む所だ！」

そう言って二人は刀を構えて相手に向かっていく

そして、丁度すれ違った

「・・・・・・・・じゃあな・・・・・・・・翼・・・・・・・・」

そう、リュウが言った後にドスンと翼が倒れた音がした

そして、翼からは闇が抜けていく

そして、元の翼に戻った

「うぐぐ・・・」

そう言って翼はフラフラながらも立った

「まだやるってのか！？」

「そんな事は僕も・・・言っていないよ・・・」

下を向いて流血しながらも、翼は言った

「僕は、戦いたくなんてなかった・・・でも・・・でも・・・」

泣きながら翼は言う

「どうしたんだ？」

「僕は・・・命令で・・・」

「死ぬのが怖かった・・・でも、もうすぐ命は耐えると思う・・・」
刀を投げ捨てて翼は言った

「情けないな・・・翼・・・貴様に罰を下す！！！！」

「フフ・・・10秒後を楽しみに待つが良い・・・」

そう言って天の声は消えた

「リュウって言ったかな・・・あいつを倒せば、此処は平和になる・・・あいつを倒せば・・・」

リュウの方を優しい目つきで見ながら翼は言った

「あいつの居る場所は？」

「狂天空っていう場所に・・・げはっ！？」

吐血をしながら翼は言った

「僕はそろそろ・・・消えるけど、リュウ達は・・・頑張ってね・・・」

そう言い残して翼は、屍を残さず消えた

そして、戦場は草も木も無い・・・荒れ地が血みどろになっている
だけだった・・・

そんな戦場で、泣き声が聞こえた

「ソウル！ソウル！返事をしてくれ！」

それは、バクの声だった

「俺の一番のパートナーだったじゃないか！！親友だったじゃないか！！」

でも、ソウルが返事をする事は無かった

ただ、乾いた戦場にバクの綺麗な淋しい雫が落ちるだけだった
「・・・一番悲しんでるのは・・・あいつだったんだな・・・」

前に進みながら、リュウは言った

「このまま、進むのか？」

「いいや、此処で少し休むかな・・・」

リュウは涙を拭って、空の方を向いた

その空は、綺麗な青で雲一つ無く、本当に綺麗な青一色と太陽の光
だけがあった

凄く綺麗だった。翼やソウルの心の様に・・・

第10話 THE・・・END

第10話 大將軍現る!？ (完結編) (後書き)

実は少し涙流して書いてたw

リュウ「自画自賛だな(汗)」

眠かった(汗)

リュウ「それでか(汗)」

次回も楽しみにしてて下さい

リュウ「宜しく」。所で、バクとソウルの関係は？」

ああー、次回書くw

リュウ「ついでに、理由は死んだからなのか？タイトルにソウルが無かった理由」

実は(汗)

リュウ「え(汗)」

第11話 次なる場所へ・・・と、その前に・・・（前書き）

ふえー・・・いつぶりの更新だろう・・・。

エル「やっとの更新だな！」

本当にそうだよ・・・。

これからは、もう少し早くしようと思うよ・・・。

バク「つか、もっと早くしろよな・・・。」

うぐ・・・はい・・・。

第11話 次なる場所へ・・・と、その前に・・・

「しかし、きれいな青空だな・・・。」

リュウは、泣いているのを隠すかのように上を向いて言った。

「バク・・・お前、ソウルという関係だったんだ？」

エルが、泣き崩れているバクにたずねた。

バクは泣いてる顔を隠しながら、答えてくれた。

「あいつとはさ・・・ずっと、仲がいいんだ・・・。」

「ほう・・・、悪いが続けてくれ・・・。」

「いっつも、俺を助けてくれて・・・絶対に人を裏切ったりしない奴だったんだ・・・。」

バクが、涙を必死にこらえながら言う。

エルは珍しく真剣な表情で聞いている様子だ。

「でもさ・・・まだ、さよならも言っていないんだよ！？ありがとうも全然いえてないし・・・。」

「死なんて誰も予想ができないからな・・・そんな事いえるはずも無いよな・・・。」

バクの言葉に、空を見ながら答えるリュウ。

流石のリュウも涙を隠すのに必死なのだろう・・・。

「ほら、バク・・・くよくよしてても何も始まらないぞ？」

「そう・・・だな・・・。じゃあ、次の場所に進もうか・・・。」

そう言って、バクが次の場所に進もうとした時だった・・・。

「大変だー！！ソウルが・・・ソウルが・・・。」

「ソウルがどうしたんだー？・・・って、あいつは死んだんじゃ・・・。」

「ソウルが一心不乱に暴れてるーっ！！」

生き残りの足軽が、大急ぎで走りながら3人に伝える。

3人は無論、信じちゃいない。

「ほっ、本当なんだってば！」

「ないない・・・って、なんか暴れてる！？」

「え・・・ちょ、ソウル！？」

リュウが驚いて叫ぶ。

エルも冷静だったのだが、ソウルの姿が見えて驚きを隠せない様子だ。

「まあ、こっちに向かってるといふ事は・・・アイツは敵だ・・・。」

「そんな事言われても・・・信じれるはずがないだろ・・・。」

リュウの言葉より、ソウルがそんな事をするはずないとバクは思っているのです。いった。

たしかに、交流が一番多いのはバクだろうし・・・そのとおりかもしれない。

「んな事言ってる場合じゃねーよ、俺らを殺そうとしてんだよ？」
「え……って、うおい！？あぶねー……。」

エルが言った言葉に氣をとられていたリュウ。
ソウルの刀が目の前に来ていたのに気づき、必死で刀で防ぐ。

「そっちがその気なら……！」

リュウはそう言って、ソウルの後ろに行く。
その時だった……。

「な……！？」

偶然ソウルの手に、リュウの手が触れる。
リュウはその時、ソウルの手に温度が無い……つまり死んでいる
事が分かったのだ。

「こいつ、死んでる……でも動いてる……ゾンビなのか！？」
「いや、リュウ君……そうじゃないなあ……。」

リュウの驚きに対して、誰かがそれに答える。
それは、春菊だった……。

「はい、正解は……っと。」

そう言って、春菊は上空に刀を放り投げる。

「痛っ！」

「これが、正解ですー。」

上空から、声とともに何者かが落ちてきた。
春菊は、笑いながら刀をしまいこむ。

「お前・・・誰だ!？」

「あ、バレちゃったんだ・・・絶対バレないと思ったのになー・・・」

「だから、お前は誰だって聞いているのだが？」

「俺は、ブラツキーのブラだけど・・・何か？」

刀が当たって血が出ている尻尾を舐めながら、ブラが答える。
ちなみにリュウは、ずっと相手の攻撃を防いだままである。

「まあバレてもいっか・・・そおりゃあ！」

「ちょ・・・死んだ足軽とかが動き出したのだが・・・」

「あー、全部俺がやってるんだよ？」

ブラが笑いながら答える。

エルは、足軽が動き出した事に危機感を感じる。

リュウはソウルと一騎打ちの最中だ。

「あー・・・楽しい、楽しい♪」

「何か勝てる方法は・・・」

「あるじゃん、アレをあいつから奪えばいいだけじゃん。」

「あの・・・あいつの持ってる人形？」

「うん。」

リュウが、必死で言ってる横から暁が普通の顔でそういう。
暁は人形で屍を操ってる事が分かったらしい。

ブラは余裕の表情で笑っている。

「ほい、げっとお。」

「あ！俺の人形かえせー！」

「エーフィの人形なんだ・・・恋でもしてるの？」

「うぐ・・・違・・・。」

暁が人形を見てブラに問いかける。

ブラは顔を真っ赤にして、必死に違うと言い張っている。

「まあ、これで・・・と。」

そう言って、暁は標的をブラの方に向ける。

すると、足軽やソウルがブラの方に動き出す。

「え・・・ちょ・・・一回待とうよ!? ね!?」

「待たないよ・・・。」

「うわわわ・・・ぎゃあああ!!!」

こうして戦場に、また新たな血しぶきが・・・。

今回は容赦ない暁だった。

「・・・さて、次のところに行くか・・・。」

「・・・ああ、そうしようか・・・。」

あきれた表情でエルとリュウが言う。

その他（春菊以外）は啞然としている。

これでいいのだろうか・・・なんて考えて終わってしまう此処の戦場だった・・・。

「・・・で、どこに行くの？」

「いや、絶対アレだろ・・・。」

バクが指をさした先には、邪気をまとう階段があった。

これが、5人の恐怖への入り口だった・・・。なんて事はまだ誰も予想していない事だった。

しかし、5人はその階段を上っていく・・・。

この馬鹿馬鹿しい、展開は此処までだと・・・信じておきたい・・・。

そんな心情の5人だった・・・。

THE END

第11話 次なる場所へ・・・と、その前に・・・（後書き）

馬鹿馬鹿しくてごめんね・・・。

バク「急いでる感が出てしまっていたな・・・。」

仕方ないじゃん、急いでたもん（汗）

第12話 ドジな強敵（前編）（前書き）

はい、久しぶりの更新です！

リュウ「本当に久しぶりだな・・・」

うん、こんなに久しぶりなのは本当によくあることだけどね（汗）

リュウ「さて、やっとラストも近くなってきたんだな・・・？」

YES！ or maybe！

リュウ「どっちなんだよ！垂直斬り！」

ギヤアアアアア！！！！

リュウ「じゃあ、どうぞー♪」

第12話 ドジな強敵（前編）

もうすぐこの戦争も終わる・・・。

6人の侍は、そう思いながら、暗い通路への入り口へと踏み出した・・・。

残念ながら、多くの犠牲を出してしまった・・・。

ソウルと、翼を殺してしまった・・・。

翼は、敵ではあったが、本当は何の悪意もない奴だった。暴走していただけだったのだろう。

この先には、翼にそんな事をさせていた中心核がいるのだろう・・・。

俺達はその中心核を倒し、この戦争を終わらせる・・・。

そんな事を考えていた矢先に、恐るべきことがおきてしまった・・・。

そう、敵の出現だ・・・。

「ブラはやられたんだね、次は僕の番だよ」

一匹の青いサーナイトが、暗闇の中で本を閉じて、メガネをしまった。

そして、そのサーナイトは指をパチンと鳴らし、自分とリュウのあたりにだけ光を浴びせる。

「うわっ!? まぶしっ・・・」

「自分でつけて何言ってるんだよ・・・、ちなみに名前は？」

おとぼけサーナイトに、リュウが名前を聞く。
リュウも光がついた時のサーナイトのリアクションには、呆れた顔をしていた。

「名前?・・・えと、僕はニュラークだよ」

「ニュラークってのか・・・悪いが、此処は通らせてもらうぜ」

ニュラークは、少し考え込んでから自分の名前を言った。

本当に忘れていたという様子がうかがえた・・・。

流石のリュウも呆れた様子だった。

春菊は「よくあるよねえ」とか言っている。

春菊以外は皆呆れているということだ。

「通りたいの?はい、どうぞ行行って行ってー」

「はあ?まあ、いいや・・・」

ニュラークにそう言われて、リュウは何も疑わずに通る。

ニュラークは、リュウの通った後、にっこりと笑みを浮かべた。

「リュウ!後ろだ!」

「な!?!」

ニュラークが突然光を消して襲ってきたのだ。

さっきまで読んでいた本だったため、腕で押さえることができた。

「中々やるねえ、それじゃあ・・・此処からが本番だよっ!」

そう言ってニュラークは、暗闇の中で青い眼を光らせた。

すると、不思議なことにリュウが浮いた・・・。

「な、なんだ!？」

「ふふ、僕だってブラミたいなものを使ったり出来るんだよ。こっちは能力だけどねっ」

そう言って、ニューラークは手を下に下ろし、リュウを地面に叩き付けた。

リュウは、どういう能力なのかは全く分かっていない。
読者の皆さんは、もう分かっただろうか・・・？

「あれ、リュウ君・・・原理とかが分かってないの？」
「勉強なんて、ろくにしてないからな・・・」

そう言ってニューラークは、メガネを再びかけて、暗闇の中で何かを用意した。

そして、光をニューラークがつけたときには・・・。
教室グッズが置いてあった・・・。

「じゃあ、勉強をしようか♪」
「お前にはついてけねーよ!!!!!」

〜30分後〜

やっとニューラークの講座終了。
リュウはぐったりとしている。

「二回目だけど・・・此処からが本当の勝負だよっ!」
「うおい!?! チョーク投げるなよ! そっちがその気なら、俺もやっ
てやる!」

そう言って、ニューラークの方へリュウは刀で突きに行く。

ニュラーグが、リュウの方を向いた瞬間、リュウが一步も動けなくなった。

まるで、金縛りにかかっているような状態だ。

「あ、足がうごかねえ・・・というか、体全体が動かねえ・・・」

「さっきも説明したよね?・・・じゃあ、改めて自己紹介するよ」

「僕の名前はニュラーグ。指定範囲の重力を操る能力があるんだよ」

ニュラーグが、メガネをかけて、少し笑って言った。

リュウは、鎖でもつけられたかのように、必死でもがいている。

そんなリュウを見て、ニュラーグはクスリと笑っている。

「かわいそうだから、やめてあげるよ」

「ま、また宙に・・・!?」

リュウは、またニュラーグに叩きつけられる。

ニュラーグはにっこりと笑っている。

「あいつに勝てる術はあるのか?」

「・・・今の段階では、おじさんもちょっとわかんないねえ・・・」

エルが春菊にたずねる。

春菊も、流石に少しだけ考え込んでいるようだ。

いつもなら余裕のはずなのだが・・・。

「最初に始末されないからこんな痛い目を見るのに・・・」

「あんなあつけねー死に方できるかよ」

「そっか、もう何を言っても無駄だし、何しても無駄だよ?」

「無駄なんて言葉はねえよ」

ニュラーグは、リュウを宙に浮かせながら、にっこり笑って、話をしている。

リュウは話すだけでも必死な感じがする。

「ニュラーグさんよお、後ろはもらったぜ・・・？」

そう言って、バクはニュラーグの後ろにまわり、刀をふりかざす。
・・・しかし、ニュラーグにはそんなものは効かなかった・・・。
ニュラーグは、片手でバクも簡単に浮かせる。

「まだまだ、お前の敵は残ってるぜ？」

「無駄だよ」

そう言って、向かってきた者たちを、いっせいに浮かせたり、動か
せないようにする。

残ったのは、暁と春菊の二人のみとなってしまった・・・。

この絶望的な状況で、6人には何ができるのか・・・？

こんな強敵に勝てるのか・・・？

そう思った時、あたりが一面真っ暗になった。

ニュラーグがやったのだろう。

「ニュラーグねえ・・・一個だけ弱いものが分かった気がするね・・・」

「僕は全然わかんないや・・・とりあえず、強敵なのはよく分かったよ・・・」

春菊は、暗闇の中でひっそりと言った。

それに応えるように、暁がぼそりと言う。

はたして、ニュラーグを倒して先に進むことはできるのだろうか・・・。

「いたっ！間違ってチョークまで浮かせちゃった・・・」

とりあえず、ニューラークはドジのようだ。

このドジで重力を操ることのできるニューラークには勝てるのだろうか・・・？

そして、春菊の分かったものとは・・・？

T H E E N D

第12話 ドジな強敵（前編）（後書き）

ふう、本当に疲れた。

ニュラীগ「名前も適当に決めちゃって・・・重力のこと本当に知ってるの？」

・・・理科でちょっとだけやったよ！

ニュラীগ「・・・（怒）」

ちよっ！？宙に浮かさないで！

ニュラীগ「ばいばい！」

急降下してるよー！！！！

ニュラীগ「次回もお楽しみにー♪」

第13話 ドジな強敵（後編）（前書き）

自分でも不思議なくらいマジメだった・・・。
恐ろしいな・・・。

リュウ「今回はギャグ要素なしか・・・？」

そうかもしれない・・・。

この私には、考えられないことですね・・・。

春菊「・・・それでは」

第13話をお楽しみ下さい。

第13話 ドジな強敵（後編）

「が・・・っ！全然動けねえ・・・っ！」

「ふうん・・・所詮この程度か、残念」

空中でじたばたしているバクを見ながらため息をつくニューラーク。
春菊と暁は、そんな様子を灰色の柱に隠れつつ、その様子をのぞいている。

真っ暗闇の中。全く目は慣れてこないような永遠の闇の中である。

「暁君、光を発するものは出来るかい？」

「うーん・・・閃光の術なら・・・」

「分かった。暁君、俺が囷になるからその隙にニューラークの前でそれを出来るかい？」

「分かったよ。やってみる」

暗闇の中で、二人でひっそりと会話する。

ニューラークの位置は、眼が青く光っているためによく分かる。

そこまで春菊が囷になって走り、その隙に閃光をするという作戦である。

春菊の推理によると、能力発動中は眼が青く光るようだ。

その眼を閉じさせてしまえば、全員落ちることにはなるが、解放されるだろう。

これが、春菊の推理である。

「悪いねえ、俺も行かせてもらおうよ！」

「うわあ、面倒くさい・・・とりゃ！」

「いまだっ！閃光っ！」

「あうっ！！まぶしっ！！」

ニュラーグが春菊を浮かせようとしたときに、暁が閃光を放つ。春菊の推理通り、全員落ちてはしまったが、解放に成功した。

ニュラーグは両手を目の前にあて、光に苦しんでいる。

その隙に、全員をニュラーグの四方八方に集めて一気に叩き潰すよ
うだ。

「今だ！やれっ！！」

「そうはいかないよ！影分身！」

「分身たちよ、いっせいにこいつらを沈めてしまえ！！」

ニュラーグが片目を開けて、分身を作って命令する。

分身は命令通りに動き、全員を浮かせようとした。

だが、分身はあっというまに全て消えてしまったのだ。

ニュラーグはきょとんとした顔で周囲を見渡している。

「え・・・なんで・・・っ!？」

「わりいな、俺だって伊達に武士やってるわけじゃねえんだよ」

なんと、あの短時間でリュウが全ての分身を斬り消したのだ。

本物だけは、斬ることに失敗したようだ。

これもある意味奇跡としか言いようがない剣術だ。

「じゃあ、ニュラーグさんよ・・・道を通してもらおうか・・・」

「そうはさせない・・・絶対に、通さないッ！！！！」

眼が今まで以上に青く光り、ニュラーグは悲痛な叫び声をあげてい
る。

そして、ニュラークから地震のように重力が重くなっていく。重力が強くなってしまったため、動くことすらできなくなってしまう。

「ウガアアアアアアアアアア！！！！！」

「身動きがとれねえ……これじゃあ、刀を振ることすらできやしない……っ！」

「俺達、このまま餓死するのか!？」

さらに強くなっていく重力に、全く身動きが取れない状態に陥っている。

しかし、そんなものに全く屈していない男が一人。

それは勿論、謎の多い男・・・。

春菊であつた。・・・。

「悪いけど、ニュラーク君……君の能力を逆手にとらせてもらうよ……」

そう言って春菊は、最初の柱から走ってニュラークのところまで行く。

重力が強く働いている空間は、ニュラークの能力なので青くなっている。

それですぐに分かるのだ。

走って空間がぎりぎり届いてない場所まで行き、刀を振りかざし思いつきジャンプをする。

そして、中央のニューラークに刀を持った春菊が急降下する。

ニュラークが気づいた頃には、後5cmの所だった・・・。

「やめてええええええ!!」

「ごめん、その願いは聞けないなあ」

一瞬、青と黒の中に赤いものが混じった……。そして、ニューラグは刀によって真っ二つに裂かれてしまった。重力の強い空間は一瞬にして無くなってしまい、中央にはニューラグの亡骸が真っ二つになって倒れている。とても見たくない景色である。

真っ暗闇なのがせめてもの救いである。

春菊は「悪いねえ」と言って刀を布で拭き、鞘にしまう。

他の全員は、あまりにもむごすぎて言葉が出なかったという……。

『使えぬ部下だった……。予想以上に、クズだったな』

全員の沈黙を破り、どこから声が反響して聞こえる。

全員周囲を見渡す。

『しかし、君達は実に優秀だ……。さあ、此处を通れ……。』

そう聞こえた瞬間、目の前に道が出来る。

そして、ニューラグの亡骸は綺麗に爆発して、消えてしまった……。

全員呆然としていて、誰も言葉を発することは出来なかったようだ……。

真っ暗闇に、灰色の階段が出来たため、全員その階段を上っていく。何故か目の前に箱があり、その箱の中には全員分の食料が入っていた。

その食料を静かに全員に渡し、階段を進んでいく。

この先には、一体何が待ち受けているのか……。

そして、あの声の正体は一体何なのか……？

謎は深まり続けるばかりである……。

T
H
E

E
N
D

第13話 ドジな強敵（後編）（後書き）

実は、本当にしっかりしてる小説なんだよ……。これが一番。ポケモン小説ってのは難しいなあ……。

リュウ「ポケモンじゃなくても出来なくね？」

あの、戦国時代がもしポケモンだったらってお話なんだよ。大河ドラマミタイナモノナンデスヨ……。

エル「100%今考えたな？」

うん、でもそれをモットーにしたい。

ポケモン達はまだ技を覚えてなくて、モノに頼っていた時代……。みたいなのをさー。

……というわけで、次回もよろしくお願いします！

リュウ「じゃあな！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8476g/>

空は青、陽は赤、草は緑

2010年11月19日16時07分発行